



巻 頭 言

他 山 の 石

(財)日本植物調節剤研究協会 会長 榑 渕 欽 也

20世紀後半における先進諸国の農業生産の躍進は素晴らしい。それは、農村労働力の大幅な都市（第2次・第3次産業）への流出という深刻な担い手問題を克服しての躍進であるからなおさらである。

このような躍進を可能としたのは品種、機械、農薬、肥料などを中心とした優れた技術革新の賜以外のなにものでもない。

ここで、イタリアにおける近代稲作のドラスチックな農法転換の歴史にふれてみたい。

イタリアでは映画“苦い米”でおなじみのようにかつては田植稲作がかなり行われていた。1960年以降農村の労働力が大量に都市に流出し、離農が続出し、農家戸数は約3分の1に激減した。それまで大量に雇用することのできた田植労力もなくなり、稲作は窮地に陥った。この窮地を脱するために1970年までの間生き残りをかけての規模拡大（1戸平均6haから30haへ）とキイ・テクノロジーとしての直播への全面的な農法転換が図られた。その結果、単収低下も来すことなく、超省力直播技術体系を実現し、そのピンチを見事に乗り切ったのである。

この画期的な農法転換を成功させた鍵は品種と除草剤にあったといわれている。つまり、直播適性の高い耐倒伏性品種の育成と優れた除草剤とその利用技術の開発に負うところ大であったという。勿論、大規模化と基盤整備が前提にあったことはいうまでもない。イタリア稲作の農法転換はまさに「禍を転じて福となす」にふさわしい、起死回生の壮挙といえよう。

ひるがえって、我が国稲作の近年の発展の跡を省みると、技術革新による生産性の向上は他国に劣らず顕著であった。とくに、除草剤の開発や田植機、自脱型コンバインの開発は大幅な省力化に寄与したばかりでなく、従前の苛酷な稲作労働を軽労働に一変した。しかしながら、経営規模の拡大が構造的に困難な我が国の零細

な稲作農家にとって技術革新のおかげで楽にコメが作れるようにはなったものの、機械装備のつけは厳しく、生活条件を圧迫することとなりいきおい主たる収入を農外に依存せざるを得なくなった。こうして稲作農家の大半が兼業と化した。

このように、我が国の稲作では技術革新が経営の自己発展に機能せず、むしろ、近代産業の発展に貢献しているという皮肉な事態を招いた。そして、この現象が農業の自己主張を弱くし、稲作の魅力ある展望を失わせている。今日、稲作農家の多くが、高齢化しあつぎがいない。したがって、近い将来、兼業農家の代替りを迎えて、担い手の激減は目に見えている。しかし、この状況はやる気のある新しい経営体を生み出すチャンスといえないこともない。今日、点の存在とはいえ、魅力的な借地型大規模稲作経営が生れつつあることも事実だ。私が昨秋訪れたある生産組織の面々は稲作に誇りと生き甲斐をもってゆとりと自信に満ちた大規模経営を展開していて頼もしかった。

大規模経営体の多くは野菜、花、果樹などをとり入れ、稲作との複合経営を進めている。

彼らは、いずれも経営の自己発展を図るために革新的技術の導入に積極的だ。特に、春の労働のピークを緩和しうる直播技術の導入にはとくに関心が強い。

規模拡大が必然の方向として予見しうる今後の稲作展開にとって直播は間違いなくキイ・テクノロジーとなるだろう。これまでの稲作とは担い手の構造・体質が大きく変り、直播農法への転換の機は熟しつつあるとみてよい。

今こそ、直播適応性品種、雑草防除技術、発芽・苗立安定化技術等の開発に技術陣の総力をあげ、早急に地域ごとの風土に好適した直播農法を確立すべきである。

イタリア稲作の“農法転換”を他山の石としたいものである。